

Daniel Donoghue による古英詩研究書の紹介と解説:
How the Anglo-Saxons Read Their Poems (Philadelphia:
University of Pennsylvania Press, 2018. 238 pp.)

網 代 敦

1 初めに

私たちが古英詩を読む際は、一般に ‘edited text’ で読むのが普通である。頭韻ごとに前半行・後半行に行分けされ、文の開始や固有名詞には大文字が当てられ、多様なパンクチュエーションが施された、言わば現代的な統語に組み替えられたテキストを読むことになる。一方、言うまでもなくアングロサクソン時代の写本テキストには、このような “visual cues” (視覚的手がかり) は乏しく写本ページいっばいに「べた書き」様式で書かれたものとなっていて、現代の書式とは大いに異なっている。古英詩の読者はこのような書式のテキストをどのように読んだのか、また読み込めたのであろうか。翻れば、写字生（または作者）は読者のためにどのような手法を用いて写本テキストを作成し、本文を読み解く情報を与えていたのであろうか。これらを解明するために、Daniel Donoghue¹ は本書において新しい知見などを取り込みながらの考察を展開している。本稿の目的は本書の内容を詳しく紹介し、アングロサクソン人が自分たちの詩をどのように読んだのか

1 Daniel Donoghue は現在ハーヴァード大学教授で、古英語、中英語、英語史、中世主義、認知論の観点からの文学研究などを主要テーマとしている。著書は *Style in Old English Poetry* (Yale Studies in English, 1987), *Old English Literature: A Short Introduction* (Blackwell, 2004), *Beowulf: A Verse Translation, by Seamus Heaney* (Norton, 2019) などがある。(https://scholar.harvard.edu/donoghue/home 参照。アクセス日:2022.9.7)

という Donoghue の見解を、コメントを交えながら追ってみることである。本書の構成は、Introduction, Chapter 1 (How to Read), Chapter 2 (From Orality to Punctuation), Chapter 3 (Verse Syntax), Chapter 4 (Eye Movement), そして単に Conclusion とする代わりに Less a Conclusion Than an Opening Up (以下 Less a Conclusion と略す) となっている。Donoghue の各論点の内容を確認しながら、本書の特徴を記してみたい。

2 Introduction について

Introduction では各章のエッセンスが先に提示されている。そこから見出せる各章の内容の道標として、ここではキーとなる文言のみを挙げることに留めておく。

Chap. 1 : Cædmon, the *Confessions*, Ambrosius, silent/oral reading, inner speech

Chap. 2 : orality, literacy, the great divide, the oral/literate continuum, punctuation

Chap. 3 : formulas, verse syntax, Kuhn's laws, Satzpartikeln, the grammar of legibility

Chap. 4 : eye-movement, saccade, fixation, cognitive psychology

Less a Conclusion : early poems, a late form of verse, 'beginning free, ending strict', the oral-derived tradition, the traditional referentiality

本書を通して頻出する重要なキーワードを掲げておく。それは、より大きな言語コミュニティーの構成員内に共有されている“competence”という概念である。Donoghue は本書においてこの語の意味を以下のように定義している。「アングロサクソン人が自分たちの頭韻詩を聞いたり読んだりする際に持ち込む口承伝統に関する深い知識。(中略)例えば、定型文を構成する際に正確な言い回しがなされているかを認識でき得ること、あるいは不適切な箇所に無強勢の語が聞かれた後に何か間違っているのではと感じ取れる能力」(p.6)をいう。詩を読み

解く上での「内在能力」のことであり、この語が本書の各論の通底となっている。

それでは各章の内容を追っていくことにしよう。

3 Chapter 1 “How to Read” について

本章では、2つのエピソードにまつわる事柄を再検討することから論を進めている。一つは Bede (c.673-735) の『英国教会史 (*Historia ecclesiastica gentis Anglorum*, 731)』(Lib. IV, Cap. XXIV) に出てくる Cædmon 挿話を巡りながら、当時の「詩」を取り巻く状況はどうであったかを論じている。もう一点は St. Augustinus (354-430) の著『告白 (*Confessiones*, c.400)』(Lib. VI, Cap. III) の中で述べられている逸話で、若き Augustinus が多忙な合間を縫って書を「黙読」している St. Ambrosius (c.333-397) の姿を目にする場面である。St. Ambrosius の「黙読」という読書行為をどのように解釈すべきか、新たな検討を施している。第一の点に関連して Donoghue は以下のような興味深い疑問を発している。(p.11)

- (1) 農場労働者たち (farmhands) はどのような歌や詩を唄っていたのか。
- (2) 歌い手は男女両方を含んでいたのか。
- (3) 皆が豎琴を弾いたのか。
- (4) 歌は長いものなのか、短いものなのか。古いものか、新しいものか。
- (5) 歌の題材はゲルマンの伝説から採られたものか。
- (6) 個々人はどのくらいの歌を知っていたのか。
- (7) 歌はみな記憶されていたのか、またどの歌い手も即興で作る才能があったのか。

これらの疑問点への回答は施されていないが、重要なことは次の点である。Bede は7世紀の farmhands が酒席で歌を唄って楽しむ能力を持ち合わせていたことが一般的であったと示唆している。ここで

言う Bede の示唆とは、原文では ‘ut omnes per ordinem cantare deberent’² (that all should sing in their turns) のことである。即ち皆が “how to sing” という文化的 “competence” を共有していたと言える点に注目しておきたい。

次の段階は、詩が書きつけられた後にそれがどのように受容されるのかという点が重要になる。終生、頭韻詩を耳にし、思い起こし、朗唱してきたことから写本で詩を読んだアングロサクソン人（朗読される詩を聞いた聴衆も同様）は詩型の手法・しきたりに精通していた。“the pre-miracle Cædmon”(p.12) でさえもその環境に置かれていた。よって「詩に関する内在的能力・知識は農民から王侯貴族に至るまで共有されていた (“competence in poetry was shared from peasants to royalty”）」(p.12) と Donoghue は捉えている。続いて「アングロサクソン人が写本の詩をどのように読んだか」という疑問の背後には、より基本的な疑問—How did they read? 「(一般的に読むという行為をどのようにしていたか)」という問題がある。この問題を考える上で、古書体、統語、韻律、写本におけるフィロロジカルな分野に目が向けられるが、これらの手段を補うものとして Donoghue はもう一つの分野を導入している。それは “cognitive psychology known as eye-movement studies”(pp.15-16) である。近年、外国語学習における ‘reading’ の実態などを分析する上で適用されてきている研究要素である。Donoghue はこれをローマ時代の読書の実践がどうであったかを理解するために採用し、その後のアングロサクソン時代の読みを解釈する上で応用した。上述したが St. Augustinus の『告白』から、そこに見られる St. Ambrosius の「黙読」の場面を引用し以下のような考察を行っている。その場面を日本語翻訳から引用する。

2 引用は、Carolus Plummer, ed, *Venerabilis Baedae: Opera Historica*, Tomus I CAP. XXII [XXIV] (Oxonii, 1896, p.259) からである。

「かれが書を読んでいたとき、その眼は紙面の上を馳せ、心は意味をさぐっていたが、声も立てず、舌も動かさなかった。しばしば、わたしたちがかれのもとにいたとき・・・かれはいつもそのように黙読していて、そうしていないのを見たことは一度もなかった。」³

中世の時代では「音読」が一般的であったということから、それに先行する時代の上記 St. Ambrosius の行為は例外であるとする通念があるが、Donoghue はこの考えに反論を投げかけている。理由は以下の点からである。

- (1) St. Augustinus は、St. Ambrosius の黙読の行為は前例のないものであるとは一言も述べていない。(p.17)
- (2) St. Augustinus 自身も人生の最も重要な機会には黙読を行っている。(p.19)⁴

そして、ここには“the interplay between oral and silent reading” (p.16) があるということを指摘し、両読書法の習わしは長い間共存してきているとする。これはアングロサクソンの読者の読みの慣行にも見出されるとし、特に黙読の行為を *Beowulf* やルーン文字が入った *Cynewulf* の一連の詩の中から探り出している。

Beowulf の例は 1687-98 が引用されているが、ここは *Beowulf* が Grendel の隠れ家から持ち帰った巨人の剣の柄とそこに刻まれた碑文を Hroðgar が眺めている (scaewode, 1687) 場面である。この柄には太古の巨人族が洪水によって滅ぼされた模様が描かれてあり、その内容

3 服部英次郎 (訳) 『聖アウグスティヌス 告白』(上, 第六巻, 第三章) 岩波文庫, 1978, p.168.

4 例えば次の個所を参照。「それでわたしは、急いでアリピウスが坐っていた場所に引き帰した。わたしはそこを立ち去るとき、使徒の書をおいておいたのである。わたしはそれを手に取ってみて、最初に目に触れた章をだまって読んだ。」(服部, 第八巻, 第十二章)』p.281 「だまって」はラテン語では “in silentio” (Donoghue, 2018, p.19) となっている。

に誘発されて傲慢と驕りへの戒めの訓告を *Beowulf* に与えるために *Hroðgar* は口を開くのであり、碑文を読んでいる間は黙読のままであると *Donoghue* は解釈している。(p.23) もちろんこの文脈において、黙読という行為が明示的に述べられている訳ではないが、もう一つの根拠として *Donoghue* は、“Even though the giant hilt occasions a nonliterary instance of reading, or rather *because* *Hrothgar’s* reading is nonliterary, the scene suggests that the poet of *Beowulf* and its Anglo-Saxon audience found silent reading perfectly normal — even the reading of runes in continuous text.”(p.23) とも述べている。Orality の伝統に基づいて作られる詩の文化の中に、黙読の要素が見られることに注目したい。

次に *Cynewulf* のルーン文字のサインが入った詩を取り上げ、語彙素 (lexeme) であり書記素 (grapheme) でもあるルーン文字が写本上に見られたとき、どのように捉えられるのかを検討している。次が *Donoghue* の見解である。「ルーン文字を音読しても語彙素と書記素を同時に産み出すことはできないが、一方黙読は脳作用によって文字を認識し意味も同時に処理することができた。」(p.26) とする。*Cynewulf* は語彙素と音素間、言い換えると黙読と音読間の相互作用に鋭い意識を持っていたと言える。*Donoghue* は「黙読と音読は絶えず相補的關係にある (“[S]ilent and oral reading have always enjoyed a complementary relationship.”) (p.29) と見なし、改めて古英語の伝統内に黙読の存在性を認めている。

続いて、この音読と黙読の関係をいくつかの理論を相対させながら、新たな視点を展開させている。まずは *Paul Henry Saenger* (*Space Between Words: The Origins of Silent Reading*. Stanford Univ. Press, 1997) である。*Saenger* は古代から7世紀以降を通してラテン・ギリシャ語に慣習的であった語間にスペースを置かないテキスト (*scriptio continua*) を読む行為は、本能的に語を声に出して読むことを強いたとし、「一語一語を認識構成するために諸音声要素を声に出して処理せざるを得ない読者にとっては、特別な認知的負荷 (“extra cognitive

burden”)となる」(*Space*, p.7)と主張した。よって Saenger は *scriptio continua* と音読 (oral reading) は歴史的に同時発生したと見ていると Donoghue は述べている。(p.31) しかしながら、Donoghue は上述の St. Ambrosius や Hroðgar の例を根拠として、Saenger のこの見解に異論を呈している。さらには、M.B. Parkes, “*Rædan, areccan, smeagan: how the Anglo-Saxons read.*” *Anglo-Saxon England* 26 (Cambridge Univ. Press, 1997): 9. の “..., even in antiquity silent reading must have played an important role. Before a text could be read aloud it had to be studied carefully beforehand, at least in private, and probably in silence.” という言及にも注目をしている。

次に、中世アラブの科学者、哲学者である Ibn al-Haytham (or Alhazen) (イブン・アルハイサムまたはアルハーゼン, c.965-c.1040) によって書かれた「目の生理的機能と視覚の過程」を取り扱った *Kitāb al-Manāẓir* (*Book of Optics*, 1027) を引合いに出し、「眼前に何度も現れてきたことがある熟知された語については、学ある者なら個々の文字を検分しなくてもその語が何であるか、即座に認識する」という見解を引用し、Saenger の理論の反例としている。アルハイサム自身は語間にスペースを置かずに文を書いていることから、当時はその状況で読みが行われていた証左となっているとする。(p.32)

Donoghue は認知心理学 (cognitive psychology) から得られる証拠に依拠して、*scriptio continua* により音読が強制的に行われざるを得なかったという Saenger の考えに懐疑的である。その根拠は以下の二つの理由に拠る。

- (1) 「音読がなされている間でも、目が語を認識する瞬間と語が音声化される瞬間との間には時間差がある。その時間差の間の読みは当然 silent である。」(p.32)
- (2) 「現代英語でスペースを置かないテキストを用いた実験によると、読みの速度は通常より 30～50% 遅くなり得るが、その割合は極度に時間がかかるものではない。被験者が、読みにおい

て認知的負担を軽減するために音読をし始めるというような、科学論文の報告は見られていない。」(p.32)

さらにもう少し実証的な実験例を引き合いに出している。それは Heather Winskel et al., “Eye Movements When Reading Spaced and Unspaced Thai and English: A Comparison of Thai-English Bilinguals and English Monolinguals.” (*Journal of Memory and Language* 61.3, 2009) で報告されたものである。現代において、タイ語・英語二言語使用者と英語一言語使用者が、分かち書きされていない英語を読んだ場合に、両者において読みのスピードと内容理解にどのような影響が生じるかという実験を参考にしている。タイ語は分かち書きされない言語である。(p.32) 英語一言語使用者の場合、分かち書きされていないと顕著な混乱を引き起こし、読みの速度は33%遅くなる。これは Saenger の研究と一致している。一方対照的に、タイ語・英語二言語使用者は読みのスピードが落ちることはない。タイ語を分かち書きした場合にも読みのスピードは少し落ちるだけである。また目の動きを観察すると、読む際にどこに固定されるかは、タイ語において分かち書きの有無に関わらず、同じ場に置かれる。具体的位置は語の中心近くである。言い換えると、脳は認知的負荷を被ってはいないという示唆になる。(p.33)

これらの見解をもとに Donoghue は、アングロサクソン人たちも含め、中世人の読みは音読から黙読へというプロセスを辿って発達したという従来の見解に異議を唱えている。そして、完全に黙読でもなく音読でもない、“monastic silence” (p.36) に目を向ける。これは声を立てずに、あるいはかすかに囁いて、口と唇を動かしながら自分自身に読みかける行為、即ち実際に発声しないで脳内で話すこと (“subvocalization” p.36) である。Subvocalization は、言語と結びつく脳の領域を作用させ短期間ではあるが語を記憶の中に留める。このように subvocalization に見られるような視覚と聴覚の結合作用は、意味

解釈に対する認知行為を高める働きをする。これは読者のテキスト理解を手助けしてくれるものである。(p.37) ここで Donoghue は見解を一步進めて、私たちの読みの行為がどんなに静かなものであっても、脳の一部は語句の音に傾注していると考える。これを“inner speech”(内言, p.37) と言い、自分自身の頭の中でなされる言語行為を指す。いくつかの認知研究は、この“inner speech”における内声(inner voice)が読解力の重要な一要素であることを示してきた。

St. Ambrosius の黙読という話から端を発した考察が上述のように展開されてきた訳であるが、以下3点の実践の応用を可能にした。即ち、

- ① アングロサクソン時代には黙読と音読の共生があったことを立証する。
- ② 多様な reading と voice が持つ永続的な重要性との間の複合的相互関係に光を当てる。
- ③ 認知研究が過去からの読みの実践をどのように解明できるのか、例証する。(p.42)

このことから得られた結果を通して、アングロサクソン時代の読者は現代の私たちが考えている以上に洗練された読みの技法を持っていたという見解を Donoghue は提示した。

4 Chapter 2 “From Orality to Punctuation” について

本章では、先ず従来二極化されてきた orality (声の文化) と literacy (文字の文化) の関係を再考することから始めている。そしてこの関係を捉え直した後で、写本に書かれた古英詩が視覚的にどのように表示されているかという問題が、パンクチュエーションとの関わりと絡めて論考されている。

4-1 Beyond the Great Divide and the Oral/Literate Continuum

アングロサクソン人が例えばパンクチュエーションといった“visual cues”にそれほど注意を払わなかった理由は、韻文テキストの読みを支えていた口承文化 (the oral culture) と大いに関係しているからと考えられる。アングロサクソン期における詩は、ほぼほとんどの母語話者が口承による伝統詩に習熟していた社会において書かれていたからである。ただこの口承という環境がどのように読者側の役に立っていたのかは、まだ満足のいく解答が得られていないと Donoghue は指摘する。(p.44) これまでの古英詩の口承理論研究を振り返ってみると、Milman Parry (*L' épithète traditionnelle dans Homère: essai sur un problème de style homérique*. Les belles lettres, 1928 (『ホメーロスの伝統的な形容句：ホメーロス文体の問題に関する論』)) と Albert B. Lord (*The Singer of Tales*. Harvard Univ. Press, 1960) から引き出された理論を Francis P. Magoun, Jr. (“Oral-Formulaic Character of Anglo-Saxon Narrative Poetry.” *Speculum* 28, 1953, 446-467) が応用して提示した1950年代に遡ることができる。その焦点は、詩人の役割、口承上の技量、形式と主題における効用に置かれていたが、近年では古英詩の理解受容に関し、口承理論は私たちに何を示すことができるのかということに焦点が移って来ている。(p.45) Donoghue はその傾向の代表的な研究として、O'Brien O'Keeffe の *Visible Song* (Cambridge Univ. Press, 1990) や C.B. Pasternack の *The Textuality of Old English Poetry* (Cambridge Univ. Press, 1995)などを挙げている。

さてそこで、これらの研究の流れの中で Donoghue が問題にした一つは、口承詩研究において大きな論争として存在し続けてきた“the great divide”という orality と literacy 間の優劣の問題である。この二極性の起源は上記 Lord (1960) によるもので、Lord はこの二極は相入れず互いに排他的故に orality から literacy への“a transitional text”のようなものはないとした。Lord は後々この見解を修正したが、“the great divide”を唱道する研究者は W.H. Ong (*Orality and Literacy*).

Methuen, 1982) を筆頭に多く見られ、literacy の方を一方的に優れていると見なしている。というのも、書くという行為は、分析的な史的記述、形式論理、言語意識、より優れた学校教育、言葉の洗練といった面での発達を育成するからである。これに対し Donoghue は John Miles Foley (“The Oral Theory in Context.” In *Oral Traditional Literature: A Festschrift for Albert Bates Lord*. Slavica, 1981, 27-122; “Texts That Speak to Readers Who Hear: Old English Poetry and the Languages of Oral Tradition.” In *Speaking Two Languages: Traditional Disciplines and Contemporary Theory in Medieval Studies*. State Univ. of New York Press, 1991, 141-156; *How to Read an Oral Poem*. Univ. of Illinois Press, 2002) らの orality 派の見解を提示する。口承文化の価値を重視しない見方に異議を唱え、literacy には見られない“cognitive and conceptual sophistication”（「認知上・概念上の洗練さ」）を orality の中に探ろうとしている。(p.45)

もう一つ Donoghue が掲げる異論点は、orality と literacy は純粹に二極化できるものなのかということである。Ong (1982) が指摘した“primary orality”（「一次的な声の文化、または全く書くことを知らない声の文化」）というものは理論的な構成概念であって、例えばアングロサクソン・イングランドには限定的にしか適用され得ないとする。Parry と Lord によって研究されたセルビアの口承詩人であっても、文字文化の真っただ中で暮らしていた訳であるし、アングロサクソンの orality を代表する Cædmon でさえ既に修道院に入る前に“a literate culture”に参加していた。その理由は図書室、写字室、典礼本が備わっている修道院の地所に住んでいたからであり、理解できたかどうかは別として、修道院の典礼式に参加し聖書が読まれるのを耳にしているからであったと Donoghue は述べている。(p.46) この指摘は Cædmon 挿話のみに注目しがちな私たちの目を、新たな方向に転じさせる良い機会を与えている。

上述の Lord (1960) の見解を改めた Lord (*The Singer Resumes the*

Tale. Cornell Univ. Press, 1995) は、特に中世のテキストは声の文化と文字の文化の慣習を結合する際の「過渡期 (“transitional”）」にある可能性を認めた。中でもラテンの文学にある程度接触した作品にその特性が見られ、例えばラテン詩からの翻訳である古英詩の *Phoenix* などは「口承伝統詩の定型の文体と伝統的な詩の諸手法を用いつつも、これまでの古英詩の伝統には捉われない詩と作詩法を十分に発達させた (Lord, 1995, p.220)」と述べている。(p.46) 但し Lord はここで “transitional” という見方には微妙な難しさがあることを示唆し、Donoghue 自身もそれを認めている。続いて、Donoghue は Ruth H. Finnegan (“Literacy Versus Non-Literacy: The Great Divide?” In *Modes of Thought: Essays on Thinking in Western and Non-Western Societies*. Faber and Faber, 1973, 112-144) がこの両者の関係を “the oral/literate continuum” と捉えた見解にも一考の余地があるとする。即ち continuum (連続的推移) という概念が曖昧であるとする。Donoghue は orality と literacy の関係は相補的 (complementary) というよりも増補的 (supplementary) とする方が好ましいと主張している。(p.49) そして literacy がアングロサクソン・イングランドのような伝統的な口承詩的表現を保持している社会に導入されると、一方の orality を危うくするのではなく、この両者の結合が伝統的口承の技量と、同時により高等な literacy をもった非凡な個人を輩出すると考えている。(p.50)

Donoghue は “from orality to literacy” というフレーズには、物事の生成と変化は全てある目的に向かって規定されているという目的論 (“teleology”) に基づく含みが見られるとする。「orality が屈して段々と literacy へと進化していったと考えるのではなく、口承作詩法が行われたより長い期間があって、それがある程度安定した環境の中で移行期にある文字化されたテキストを保持していた」(p.53) という見解を与えている。この捉え方が今後の主流になると思われる。次はパンクチュエーションの問題である。

4-2 Systems of Punctuation

古英詩の写本に見られるパンクチュエーションは、認識されている以上に「体系的」であり得ると Donoghue は考えている。但しそれを理解するためには、アングロサクソンの写字生が用いていたパンクチュエーションの種類を概観しながら、もう少し大きなコンテキストに立って考える必要がある。というのも、もし一連の明確な標示記号（即ち“visual cues”）のような現代の書記法に相当する慣例を持たないとするならば、アングロサクソン人はそれに代わるものとして何を使用したであろうかという問題が提起されるからである。多くの選択肢⁵が可能であったが、古英詩を転写する際に採用された実践方法はラテン詩、古英語の散文などとは異なるものであった。（pp.53-54）一般に、アングロサクソン・イングランドでは4つの *positurare* (lit. positions) がラテン語の典礼書の中で用いられるようになった。それらは、*punctus elevatus*（文を均整の取れたパートに分ける）、*punctus versus*（半行あるいは文の末尾に置く）、*punctus circumflexus*（より小さな統語単位に分ける）、*punctus interrogatives*（疑問符）である。（p.56）但し、これらの記号をアングロサクソンの写字生たちは積極的

5 アングロサクソン人が発達させた慣行としては、以下のものが認められる。（pp.54-55）

- (1) 多様なスペースの使用：語間のスペース、より大きなセクションを構成するテキスト間の空き、半行（短行）単位の配列（*verse lineation*）、余白。
- (2) テキストの最初か主要な分割部にある大文字群。あるいは今日、文またはパラグラフと呼ばれる単位を標示する単独の大文字。
- (3) パンクチュエーション記号（*the point*：古代まで遡る一番単純な記号 / *a raised point* or *punctus* : *scriptio continua* で書かれたテキストはこれでもって語の境界を示す / 統語上の分割を示すもの → *a minor pause* を示す *colon* / *a major pause* を示す *comma* / 文末を示す *a high point*）
- (4) ネウマ（*neum*）と称されるもので、そもそも中世の典礼用の写本に記載された単旋聖歌に記された抑揚や、旋律のフレーズごとの区切り（*musical phrasing*）などを示す記号。これが統語的フレーズと一致しているので、8世紀後半までにパンクチュエーションの文法的記号として解釈されるようになった。

に古英詩に適用している訳ではない。それに対して、古英語の散文はより多くの *positurare* を使用している。詩の方が散文よりも複雑な形式をしているので、複合的機能を表示できるパンクチュエーションの利点をなぜ使用しなかったのかという疑問が当然生じる。(p.56) この理由を探るために Donoghue は O’Keeffe (*Visible Song*, 1990, pp.138-143) が取り上げた Aldhelm (d.709 or 710) の *Enigma C* とその古英語訳と思われる Riddle 40 の比較に再注目した。そこにおいて両者の行割合を検討すると、古英語の翻訳者はラテン詩の 1 行に対して古英詩では 2 つの半行詩に再構成し、フルの 2 行ごとの行末に *raised point* を置いていることが認められる。(p.57) なぜ古英詩は直接の原典に見られるパンクチュエーションの実践を活用しなかったのであろうかという疑問が当然生じる。

アングロサクソンの写字生がラテン詩を転写する時は規則正しく、行配列、大文字、パンクチュエーションを採用した。古英語の散文を転写する際は、少なくとも 10 世紀の後半頃までにはパンクチュエーションの分類体系を採用している。一方、*Genesis B* の典拠となったようなラテン詩や古サクソン詩から古英語への翻訳の際は、アングロサクソンの写字生や翻訳者は原典に見られる “visual cues” をほとんど保持しない選択をしているのである。(p.62) アングロサクソン人は定型句や半行の境界を知っていたから、それ程パンクチュエーションに依存しなくても詩を読むことができたという想定もなされるであろう。この選択の根拠の可能性が、Robert Frost の詩のタイトルである ‘The Road Not Taken’ を借用して次のセクション (pp.63-68) の小見出しのもとに述べられているが、本稿ではここはスキップして話を先に進めることにする。より重要な大きな要因が他に求められるからである。

4-3 The Road Not Taken (省略)

4-4 A Survey of Old English Verse Punctuation

ここで再度 O’Keeffe (1990, pp.153-154) の次の見解に注目している。パンクチュエーション (or pointing) の実践は時代に連れて変化し、11世紀後半頃までには写字生は前世紀よりも多くの points を付け加えているとする。Pointing が頻繁になって行く傾向は orality から literacy への文化的移行を示している、換言すれば textuality が整ってくるということになる。(p.69) 補足して言うならば、これは写字生またはアングロサクソンの読者が、散文のように書かれた詩を目で韻律をつけて読むことが次第にできなくなっていく、それによって後期の作品に韻律上の分割を示すパンクチュエーションの使用が増えていった証左であると言える。一方で、特に初期のテキストにパンクチュエーションといった「graphic cues」が本来数少ないことは、古英語の定型詩を転写する際に、口承によって伝達する習慣を強く示している (O’Keeffe, 1990, p.21)」ということができる。Orality と literacy を相反する関係にあるもの（後者が台頭したので前者が後退した）として見るのではなく、両者のダイナミックな増補的關係にあったと見るのが好ましく、1000年を境にする20年間前後の頃のように、まだ口承による伝統の活気が残されている時には、アングロサクソンの読者たちは自分たちが古英語散文やラテン詩になした程には“visual cues”に依存する必要はなかったと Donoghue は断定している。(p.76) この見解をさらに立証づけるものとして、「ほとんどの詩が残されている写本本文にパンクチュエーションが少ない理由を理解する鍵は、“verse syntax”（半行における統語構造）を含むより大きな体系の中にパンクチュエーションが組み込まれているからである」(p.76) との言及は注目されるべきであり、この“verse syntax”の問題が次の章のトピックとなっている。

4-5 Punctuation as System

ここでは、パンクチュエーションを一システムとしてどのように考

えるか、それは言語のより大きなシステムに吸収されるのか、話し言葉との関係は何か、綴りと語分割のような他の書記上の慣習とどのような関係があるのか、といった問題が提起されている。(p.77) パンクチュエーションの位置づけに関し Donoghue は、Geoffrey Nunberg の *Linguistics of Punctuation* (California: Center for the Study of Language and Information, 1990) における「パンクチュエーションを書き言葉のより大きな言語システムの中にある、下位組織と見なす。話し言葉に類似するいくつかの特徴と照らし合わせることによって書き言葉の諸特色を特徴づける」(1990, p.11) という見解に従っている。この観点から Donoghue は「パンクチュエーションを施す目的は、話し言葉を転記する際に失われたものを補完することである」(p.77) とした。また Donoghue は Nunberg が、テキストの構造の基本単位がパラグラフでありテキストセンテンスである体系内のパンクチュエーションの機能を理解するために、“text grammar” というカテゴリーを設定したこと (Nunberg, 1990, p.25) にも注目した。ここから、西洋の写字生の伝統のどのポイントで“visible cues” がテキスト文法 (“textual grammar”) の中に取り込まれたか、言い換えると、いつこの慣習が「標準化され、精巧化され、自律化された」ものになったか、どのように指摘できるであろうかという疑問を発している。この最初期の体系は、母語として話されていない時の環境下にあるラテン語のために考案されたものであった。そのような環境で、パンクチュエーションという慣習は oral performance を導く記号から統語構造を表示する記号にすぐに移行し、十分洗練化された “textual grammar” となったという見解を引き出している。(p.79)

さらに次のような M.B. Parkes (“Contributions of Insular Scribes for the Seventh and Eighth Centuries to the ‘Grammar of Legibility.’” In *Grafia a Interpunzione del Latino nel Medioevo*. Edizioni dell’Ateneo, 1987, p.16) の “the grammar of legibility” という考えに触れている。即ち、書かれたテキストは時間的にも空間的にも広がった不特定の聴衆を対象にす

る。よって写字生は聴衆と触れ合えないことから、テキストのメッセージが容易に理解されるように自分の転写本の中に、ある種の *decorum* (複合的な書記上の慣習と書かれたテキストのメッセージとの間の関係を規制するルール) を置かなければならなかった。「閉ざされたテキスト体系の中で、読みを容易にさせる機能を持った一連の記号による手法 (p.81)」ということから、この *decorum* を “the grammar of legibility” と呼ぶことができるとした。(pp.80-81) 8世紀の Bede の *Commentary on Proverbs* の写本には、この “the grammar of legibility” の対象である具体的項目 (行の配列、スペース、パンクチュエーション、そして字体) の説明が施されてある。よって、8世紀までにはアングロサクソン人はこの “the grammar of legibility” を受容したということが理解される。(p.81) 但し、アングロサクソンの写字生は、ラテン語あるいは古英語の散文を筆写することから転じて、自国語の詩を転写することになると、テキスト範疇の標示記号を自由に無視している。(p.82) というのも、古英詩の読者は “verse syntax” なるパンクチュエーションに代わるものを “competence” として持っていたからである。

本章の最後 (p.83) に、Donoghue は第1章と第2章で論議した問題点を取り上げるきっかけとなった項目6点を挙げている。即ち、writing と reading の史的発達に関する以下の想定に対する疑問点 (あるいは “canards”) である。

- 1 黙読は現代性を示す特徴として出現した。
- 2 分かち書きされていないテキストは認知的に負荷がかかる。
- 3 literacy は orality よりも優れており、(互いに) 正反対の立場にある。
- 4 中世においては書記上の手法は未発達の状態であった。
- 5 韻文の視覚に訴える標示法は、textuality へと向かう進展を示している。
- 6 体系的なパンクチュエーションが整うのは印刷術が到来した後のみのことである。

Donoghue はこれらの想定を再考すべきであると主張する。前近代の人々はいろいろな制約によって足枷をはめられているが、後世紀に至ってのみ、その足枷は解き放たれるものであると考られている。例えば音読はその後、黙読へと移行するものだと当然のように推定されてきた言明に、その偏見的考えが見て取れるという。(pp.83-84) Literacy は orality よりも優れているとか、パンクチュエーションも時系列的に発達し時代が経過するにつれ、それらの発達は「現代性」を示しているという考えに落とし穴が潜んでいることを注視しておかなければならない。

5 Chapter 3 “Verse Syntax” について

第3章では、読み手・聞き手が詩を理解し得るために、古英詩が機能する際の本質的な要素は何かが考察されている。古英詩の構造的特徴を見る上で、従来優先して注目されてきた対象は定型システム単位となった半行を構成する名詞句 (noun phrase) であった。例えば halgan reorde や eorla dryhten といった半行構成句は前半行・後半行や一文の要素として節頭・節中・節尾のどの位置にも現れ、作詩において詩人の立場からは高い適用性があることが明らかにされている。しかしながらそれだけに止まると、この半行句を含む節が従属節であるかどうか、その節がどこで始まりどこで終わるのかといった情報までは読者に伝えることができない。それでは読み手はどこに注目して詩に接していたかを考える上で、Donoghue はもう少し大きな単位で見る必要があることを主張し、その単位を “verse syntax” とした。(pp.85-86) この章の後半は “verse syntax” と相補的に関連する写本のパンクチュエーションについてである。口誦定形、韻律、統語、写本のパンクチュエーションの深い相互関係は、次の章で取り扱う eye-movement studies と呼ばれる認知心理学 (cognitive psychology) の分野に目を向ける基盤を置くことになる。

5-1 Formulas and Syntax

先ずここでは従来の口承定型理論が2つの発展的な方向に移行してきたことを指摘する。その一つは、「定型表現はもはや口述による作詩上の指標とは想定されない」という点と、もう一つは「定型を構成するものは、厳格な型 (“rigid template”) から定型システム (“formulaic system”) と呼ばれるものに拡張されてきた」ということである。(p.86) このシステムを J.D. Niles は、「韻律と統語において同一の基本的パターンを持ち、少なくとも一つの主要な統語要素を共通に持っている詩行グループ」(*Beowulf: The Poem and Its Tradition*. Harvard Univ. Press, 1983, p.123) と定義した。*Beowulf* の後半行によく現れる Sievers type B としての用例を、Donoghue は Niles (*ibid.*) から与えている。例えば、*mid minra secga gedriht* (633b), *mid þinra secga gedriht* (1672b), *mid his eorla gedriht* (357b), *mid his hæleþa gedriht* (662b) などである。(p.86) 但し、Niles が定義において言及した「統語」とは半行フレーズ内の要素の順序に関わるものに限定されているが、Donoghue は半行を超えた統語構造の場合でも定型パターンが現れるとする。例えば、*þæt ic sænæssas geseon mihte* (571), *þæs þe hi hyne gesundne geseon moston* (1628), *þæt hie seoððan no geseon moston* (1875) などに見られるように後半行に助動詞の過去形が伴われた共通の語彙項目 *geseon* が現れ、その前半行には接続詞の *þæt*, *þæs þe* かつ代名詞が共起し「“verse clause” を標識」するタイプとなっている。(p.87) 特に Donoghue は、繰り返される語彙項目と同時に節の開始を支配する “verse syntax” の一般的な原則を含めたものを “formulaic system” として考えることが重要であると強調する。というのも、詩人も読み手もこの「システム」を熟知していたであろうと推測されるからである。このことを支持するものとして、Donoghue はさらに Andy Orchard (*A Critical Companion to Beowulf*. D.S. Brewer, 2003. Appendix II: Repeated Formulas in *Beowulf*, p.294) からの以下のような用例—*Nolde eorla hleo ænige þinga* (791), *Heht ða eorla hleo eahta*

mearas (1035), *Ɔa git him eorla hleo inne gesealde* (1866), *elne geeodon, to Ɔæs Ɔe eorla hleo*, (1967), *ac me eorla hleo eft gesealde* (2142), *Het Ɔa eorla hleo in gefetian* (2190) —を提示している。ここでは定型表現の *eorla hleo* の前に無強勢の機能語である副詞、代名詞、助動詞、接続詞が先行している。そして *eorla hleo* を伴う半行はどれも節の始まりとなっており、写本では 1967 行を除いて他の半行の前に皆ポイントが付されている。ここにも “formulaic system” が提示されており、読む行為における一助となっていると言ってもよいであろう。

5-2 The Heresy of Verse Syntax

古英語の統語に関して解決されていないトピックの一つは、散文と韻文の間の関係がどうなっているかということがある。「古英語の言語は日常の散文パターンの中から選択されたもので構成されている (“[T]he language of OE poetry is made up of a selection of ordinary prose patterns.”)」（Bruce Mitchell, *Old English Syntax*. Vol. II. Clarendon Press, 1985, § 3959）、また「古英語は実際のところ条件付けられた散文である、換言すると頭韻でもって特別に配列された話し言葉である (“Old English verse is really conditioned prose, i.e. the spoken language specially arranged with alliteration.”)」（Marjorie Daunt, “Old English Verse and English Speech Rhythm.” In *Essential Articles for the Study of Old English Poetry*, Archon Books, 1968, p.290）という見解がある。これに対して韻文のある特徴は散文の統語と希薄ながらも関連があると認めつつも、Mitchell のような見解を受け入れない、あるいは懐疑的な者もいる。散文が先行し韻文がその派生形と仮定することは、前者が古英語の統語の基本形を提示するという含みを持っている。その結果、韻文は韻律によって「歪められた」統語を示しているとの帰結となる。(pp.89-90) Donoghue はこれに対して懐疑的である。というものの、韻文を「条件付けられた散文」とするには2つの問題があるからである。その第1点はそのような考えは散文を暗黙裡に話し言葉

と同等に捉えるということになる。その時代の話し言葉がどうであったかを参照し得る古英語のネイティブスピーカーもいなければ、当時の話し言葉を転記した信頼できる資料もないので実証が困難である。また散文は話し言葉を転記したものと同じではなく、独自の伝統的手法がありどちらかという話し言葉というよりも書き言葉に関連している。それ故、一般に“oral verse”と言える存在は認められるが、少なくともアングロサクソン時代には“oral prose”なるものはないと断定する。

次に生じる問題点は以下のことである。古英詩が技巧的に工夫され口承によって伝達される表現様式として発達してきたものすると、Alfred や Ælfric の時代の話し言葉に還元できない特徴を保持しているということである。というのも口承詩は保守的でより初期の話し言葉の特徴を留めているからである。(p.90) もしそうであるならアングロサクソン後期の読者は前期の詩を読むのに困難を来したのだろうか。実際は、詩はその言語をそのままに押しとどめておくことはなく、言語が変化するにつれ詩の伝統のいくつかも変化している。また各世代の詩人とその聴衆は古の伝統の中に参与しているので、話し言葉と密接な関係を保持している。そして古英詩は保守的で旧式な表現を持っているとしても、古英語の言語共同体という大きなコンテキストの中に存在している。ある基本的な意味で詩は“the spoken vernacular”の一部であると Donoghue は考えている。(p.91)

Donoghue は古英詩では韻律と語順が解きほぐせない程に密接な相関関係をなしていることを指摘する。この見解は、韻文の統語は韻律などの規制的手法により歪められているとした Mitchell らのそれと相対している。韻文は古くから伝統というものに深く根付いていて、その韻律と語順は日常の話し言葉とは一線を画するほどに様式化されており、歪められている訳ではないと主張する。(p.91) 但し、The Exeter Book の詩に見られるように、二音節が単音節化するといった同時代の話し言葉の投影も見られることから、韻文が話し言葉と大き

く切り離されているということではないとも述べている。「アングロサクソンの聴衆や読者は韻文のくだりを理解するために、それを“a non-poetic word order”に組み替える(“decode”)必要があったか?」あるいは、「聴衆は長い間に培われてきた詩的慣例を通して、詩を理解する“competence”というものを持っていたか?」私たちがこう言った問いかけをすることは、古英語を読み解く上で私たちの現代的な手法を1000年以上前の聴衆に投影してしまう危険性を孕んでいる。そのようなことがないように注意したいという警告を Donoghue は発している。(pp.91-92)

5-3 Reading Verse Syntax

最初に、Calvin B. Kendall (*The Metrical Grammar of 'Beowulf'*. Cambridge Univ. Press, 1991, p.29) に基づき“verse syntax”の中に生起する3種類の半行の位置が検討されている。Kendall の3分類法(I.*clause-initial* / II.*clause-non-initial* / III. *clause-unrestricted*) に全て従っている訳ではないが、Donoghue は“clause initial”, “anywhere”, “anywhere but the head of the clause”と分類した。これを踏まえて読者は統語をどのように「読み解いていく」(Donoghue の言葉でいえば“navigate”)のかを考える際に、“clause-initial”(節頭)になければならない半行が統語情報を与える上で重要となる。その“clause-initial”を占める典型的なものは、節を導く接続詞、ac, gif, ond, þeah, swa, þonne, þa である。接続詞以外では、Donoghue は節内の第一半行(the first half-line of a clause)のみに現れるものとして、mæg や sceal といった単音節の法助動詞を挙げている。さらに2音節分解できる magon, sculon も現れる場合もある。この特徴は口承伝統における“competence”を持っている読者には、写本のマージンからマージンに書かれた本文の中で節の冒頭がどれであるかを見極める鍵となっている。(p.92) この際、このような単音節あるいは2音節分解できる法助動詞を“light auxiliary”と呼ぶ。また ongan, geseah といった無強勢の接頭辞を持つ

ものもこの範疇に入れる。一方、法助動詞でも *mihton* や *scolde* (*scolde*) のような 2 音節の “heavy auxiliary” は節のどの半行の位置にも現れる。この場合は、読者が節の開始を認識するのに当たって、*ongan* や *geseah* の場合ほど役には立たないが、全体としての “verse clause” を理解する上では非常に重要であると見なしている。(p.93)

また、このような生起は法助動詞以外の次のような場合にも見て取ることができる。即ち、不定詞あるいは過去分詞といった準動詞を伴う定動詞がどれも “light (=monosyllabic or resolvable to one syllable)” であるなら、節内の第一半行に対する同じ制約に従い、もしそれが “heavy” であるならどの半行の位置にも現れ得る。(pp.93-94) 例えば以下のようなものである。

het or *ongan* + infinitive / *hafað* + past participle / verbs of motion (ex. com) + an infinitive / accusative-and-infinitive constructions / passive constructions with a form of *wæs* or *wearð*

定動詞が “light” である限りそれを含む半行は、「clause の opening を示すシグナル」となる。このことは、帰属文化に同化している読者には理解されるとする。但し、全ての単音節の動詞に当てはまる訳ではない。(p.94)

この生起の傾向を Donoghue は *Genesis A & B*、そして *Andreas* の用例から検証している。*Genesis A & B* の場合では、音声的に類似している名詞 (*wearð*) と動詞 (*wearð*) の例の比較を通して考察を与えている。名詞 *wearð* は 14 例中 9 例が a non-initial half line に現れ、動詞 *wearð* (1 例は *wearð*) の場合は 3 例を除いて全て節内の第一半行の位置をとっている。これは “verse syntax” により条件づけられた特徴であると見る。次に *Andreas* の場合では、336 例の auxiliary-and-verbal-pairs (“light” と “heavy” 両方の auxiliaries を含む) の内、202 例が節内の第一半行に現れる light auxiliaries であることを実証している。これ

は 1722 行中、5 行につき 1 例出現するということになる。これに加えて、*beon* が受動形で用いられるパターンや、全ての単音節の連結詞 (*wæs, sind, bið*) も節の第一半行に限定される。一方、*wæron, sindon* や他の音節のものはどの半行の位置にも現れることを認めている。(p.94)

ここでまた *Andreas* の例を引き、以下のような注目すべき結果を導き出している。115 例の単音節の連結詞中、113 例が節の第一半行に現れ、詩全体の 315 例の節が a clause-initial half-line を示す動詞を含んでいる。*Wæs, sculon, ongan* に会う読者は、節を導く接続詞や視覚に訴える manuscript point といった他の統語標識が伴われていなくても、節の始まりを見出すであろうとし、これこそが “verse syntax” 独特の特徴であり “competence” という内在の能力を持った読者、聴衆には「本能的に」認識されたことであろうというのが Donoghue の主張である。(p.95)

次に Kuhn の法則 (Kuhn’s Laws, 1933)⁶ が読みの行為をどのように容易にするのかを考察している。Kuhn は次の 2 つの項目に関する法則を公式化した。「韻律強勢のパターン」と「節の始まりにおける語配置」である。端的に Kuhn の法則を述べると、代名詞、接続詞、短い音節の副詞、助動詞、不変化詞、軽い (light) 定動詞 (これらは *Satzpartikeln*⁷ と呼ばれる) のような無強勢の軽い要素は節頭 (clause-initial) の位置に密集する傾向にあるという、語の節における分布のこと⁸である。これによって “verse clause” の特徴的な部分を記述し、詩の始まりは散文のそれと異なることを指摘した。ここで Donoghue

6 Hans Kuhn, “Zur Worstellung und -betonung im Altgermanischen.” *BGDSL* 57 (1933), 1-109.

7 英語では sentence particles のこと。意味的に軽量の機能語で、人称代名詞・助動詞・いくつかの副詞などが相当する。

8 Yasuko Suzuki, “Towards a linguistic interpretation of Kuhn’s Laws: With special reference to Old English *Beowulf* (Part III).” *Journal of Inquiry and Research* 97, 2013, 1.

の言及に基づきながら、Kuhn の第一法則にもう少し詳しく触れておこう。

Kuhn の第一法則 (the law of sentence particles) (Donoghue, pp.96-97)

- (1) *Satzpartikeln* は節の最初の dip⁹ に生起し、その節の第一強勢あるいは第二強勢のある語に後接¹⁰する。
- (2) *Satzpartikeln* を含む dip は第一強勢のある語の前後に生じる。無強勢の不変化詞が一つのそのような dip に見い出される。そのような制約がない場合は、*Satzpartikeln* は節の語順においていろいろな位置への配置がなされる。
- (3) *Satzpartikeln* が韻律強勢を伴わない場合は、それらは節内の第一半行の中に見い出される 2 つの位置のどちらかに現れる。
- (4) *Satzpartikeln* が他のどこかの位置に現れる場合は、それは韻律的に強勢のある位置に見い出される。
- (5) 語に関する *Satzpartikeln* 以外の 2 つの他のカテゴリー
 - ① stress word と呼んでいるもの：名詞、形容詞、不定詞、与格不定詞、過去分詞といった動詞の不定形→これらは節のどこにでも現れ、典型的に韻律強勢を持つ。
 - ② *Satzteilpartikeln* (sentence-part particle) と呼んでいるもの：前置詞、動詞と結合した否定副詞 *ne*、所有代名詞、名詞に添えられる *se* といった限定詞→語順におけるこれらの位置は、重要価のより高い文要素への付加によって決定されるので、韻律強勢は欠くことになる。但し場合によって、所有代名詞や前置詞のような *Satzteilpartikeln* は通常的位置から外れると韻律強勢を獲得する。→これは Kuhn の第二法則に関連する。

さらに、Haruko Momma (*The Composition of Old English Poetry*. Cambridge Univ. Press, 1997) は、以下のような説明を施している。

Kuhn の第一法則は *Satzpartikeln* における「韻律上の制約」に関するものであるが、この法則を *Satzpartikeln* における「統語上の制約」

9 頭韻行中の無強勢部分。1 音節以上で満たされる位置をいう。

10 後接的 (proclitic)：その語自体には強勢がなく、後続する語に密接に結びついて発音される語。冠詞・前置詞・助動詞など。Ex. I swear t' God I will. の t' = to / o'clock の o' = of the / a dog [ædɔg] の a)

と言い換えることができる。即ち、Kuhn の ‘dip’ という「韻律概念」を ‘stress’ という「作詩法上の概念」に、そして Kuhn の ‘clisis’ という「音韻概念」を ‘order’ という「統語概念」に置き換えることによってそのように置換できる。Satzpartikeln は節の第一か第二の強勢要素の直前に生起する。Kuhn の第一法則から予測できることは、一つの Satzpartikel が節の中に生じる時、Satzpartikel は節の ‘initial position’ を取るか、あるいは第一と第二の強勢要素の間に来る。さらに同じ節内に生起する二つ以上の Satzpartikeln は、節の ‘initial position’ にまとまって置かれるか、あるいは、第一と第二の強勢要素の間に来る。(p.56)

以上の法則に基づき initial clause dips の役割を見ると、なぜある要素の語順が詩には現れないかの判断ができる。例えば Donoghue は *Beowulf* 1841-42a の例を挙げている。

þe þa wordcwidas wigtig drihten
on sefan sende

最初の語 þe は与格の人称代名詞で、節の初めにあり無強勢となっている。語の位置と韻律強勢が置かれていないことからこれは Kuhn の第一法則に沿うものである。1841 行の語順を変えた以下のような構造は古英詩にはほぼ見られない。

* wigtig drihten þe þa wordcwidas

þe のような代名詞が冒頭の無強勢の位置以外に見られるときはいつでも、その語は韻律強勢を必要とする位置に現れる。(p.98) Kuhn の第一法則は古英詩の作詩法の役割を解明してくれるものである。もし有能な読者がこのような一連の無強勢の語に出会った時、これは節の始まりを示すと予測するだろうと Donoghue は指摘している。(p.99) Kuhn の第一法則は節の始まりにおける統語と韻律の独特な組み合わせ

せの様相をすっきり説明しており、仮説的に詩行を構成し直す余地がなぜ見い出せないかを示している。韻律のみ、(散文的な) 統語 (prose syntax) のみでは説明しきれない点があり、Kuhn の第一法則は両者を抱き合わせてそこに見られる “verse syntax” を説明している。(p.103)

The first half-line 内に一位置を指定条件化するという事は、特に古英詩の読者と聴衆にとっては重要な制約事項となる。「無強勢の particles は節の頭、そしてそのみに置かれるとした場合、non-initial half-lines の particles には強勢が置かれるであろう」という法則にはそれなりの正当性がある。この正当性を、アングロサクソンの聴衆や読者は経験を通して「習得・内在化し (internalize)」ていき、テキストの統語構造を読み分ける、あるいは聴き分けていく上で使用することができたのであろうと Donoghue は言明している。(p.103) Donoghue の強い主張が以下の点に見られる。「詩人は良く整った half-line あるいは verse paragraph を構成するものに対し決して誤ることのない直観 (“an infallible intuition”) と即座の理解力 (“an immediate apprehension”) を備えていた」ということである。(p.104)

口承詩を理解する上でも同様な直観が “an acculturated audience” にも当てはまるとする。古英詩がどのように受容されたかを論じる場合に、*Satzpartikeln* に関する Kuhn の法則は分析的明晰さ¹¹を持っており、韻文と散文の重要な相違の核心に踏み入っている。韻文は詩的言語と韻律的制約で装飾された単なる散文ではないことを明らかにしている。

5-4 Where Punctuation Comes in

古英語の “verse syntax” は認識されてきた以上に、写本のパンクチュエーションと密接に関わっている。アングロサクソン・イングランドにおけるラテン語の詩は “grammar of legibility” となる視覚的手がかり

11 韻律強勢と語順に関わる *Satzpartikeln* に関しては、その名称の問題も含めて批評的な見解もある。Donoghue (2018, p.97 以下) 参照。

としての行の配列、パンクチュエーション、大文字化に依存しているが、古英詩はもっと複合的、相補的な標識となるものに拠っている。それらは、書記的、韻律的、統語的、定型的なもので、これらが一緒になって読者に写本の詩が理解できるようにしているのである。*Beowulf* や *Andreas* といった詩の “verse syntax” は、本来ならさらなる精巧なパンクチュエーション体系が必要となるところを、その必要性を軽減させている役目を担っている。その後、語間のスペースを導入したことに続いて、初期のアングロサクソンの写字生にとってパンクチュエーションが特に重要な新機軸となっていった。(p.107)

その中で *The Beowulf MS* を改めて見てみると、次のような特徴的な pointing と思われるものが現れている。(1) a simple raised point が散在している。(2) マーク総数は 624 で、100 行ごとに 20 認められる。(3) 現代の校訂本では、大部分が a full line を終結させるものである。(4) 45 だけ行の中間に来る。(100 行につき 2 以下) これらをまとめると、平均して 5 行ごとにポイントが行末に置かれ、大体 70 行ごとに一度行の中間に来る。全てではないがポイントの多くは節の終わりに来る。行末と節末というのが *Beowulf* の pointing の一般的傾向である。(p.107) Donoghue は、具体的に 1777 から 1845 に現れるポイントを検討¹²している。18 個のポイントの内、16 個のポイントが頭韻を構成する長行の最後に来ていて、その内 12 個が節の末尾に位置している。ほとんどのポイントは韻律 (the second half-line の末尾) と統語 (節の末尾) の特定の接点のところにも現れる。(p.110)

5-5 Clause-Initial Dips in *Beowulf* (省略)

5-6 Variance in Punctuation

The Beowulf MS の 1777 から 1845 に現れるポイントのほとんどは、

12 この具体的検討は p.125 以下の Variance in Punctuation でなされているので、pp.113-125 の Clause-Initial Dips in *Beowulf* への言及は省略する。

その位置に特定された機能 (“localized function”, p.125) を持っている。Donoghue は以下のようにその機能を分析した。(p.125)

- (1) 隣接する要素を区切ってどれとどれが同格であるかを分かり易くする。

cwæp he þone guðwine godne tealde ·
wigcræftigne (1810-11a)

ここでは形容詞 *godne* と *wigcræftigne* が離れた同格関係を形成している。*tealde* の後のポイントが離れた同格関係にあることを示している。

- (2) 半行の切れ目を示す。(一行の終わりから次の行の初めへと頭韻音が続いていると思われるとき *half line* の境界線を記す)

he mæg þær fela ·
freonda findan; feorcyþðe beoð (1837b-1838)

- (3) 定型表現 (*X mapelode*) の前に置かれる。

þæm þe him selfa deah
· Hroðgar mapelode (1839b-1840a)

- (4) *clause-initial dips* の前に置かれる。

· þa wæs eft swa ær ellenrofum (1787)

写字生は “*verse syntax*” と相補的に作用するようにこれらの *pointing* を用いている。そして、これらは写本の詩の読みを可能にする “*the oral/literary matrix*” に役立っている (p.126) と Donoghue は結論付けている。

現代の古英詩の諸校訂本 (*editions*) は文やパラグラフのレベルで、多様なパンクチュエーション・マークを施し “*tight syntactic control*” を課してしまっているが、写本における連続する *clause* の流れはそのような *control* なく行われている。それというのも、終生口承伝統に

参与してきたアングロサクソン人にとって、音読に際しても黙読に際しても現代人と異なる読み的手段を培っていたからである。(p.127) この点においても、現代人の語法感覚を写本に記された古英詩の読みを持ち込む危険性を認識しなければならない。

6 Chapter 4 “Eye Movement” について

眼球運動の研究は、読書におけるパンクチュエーションの役割を探求するために始まったばかりの分野である。(p.149) また、眼球運動と読みの関係は近年英語教育においても取り上げられるトピックの一つとなってきている。テキストを読む際の眼と脳の間における複合的な「振り付け法 (“choreography”）」(p.129) を考察する認知心理学の一分野で、英語教育では母語話者と第二言語学習者の読みの実態を眼球の動きに照らし合わせて比較考察し、学習の読みの向上方法を考案する際に導入されている研究である。Donoghue はこの眼球運動の研究を応用し、写字生が口承伝統の慣習を第一に心に留め詩を書き写す最中に、目がどのように写本の詩行上を移動するか、また読み手の場合の目の動きはどうであるかを解き明かそうとしている。(p.129)

6-1 Eye Movement in Reading

最初に英語やラテンアルファベットを用いた言語における読書の際の眼球運動の特徴が、以下7点述べられている。(pp.129-130)

- 1 saccade (眼球の瞬間的運動) : 読書中、1点の注視・停留 (fixation) と次の1点への注視・停留の間に起こる眼の急速な水平運動；眼球の跳躍性運動。英語の黙読において7～9文字、音読においてはもう少し短い。
- 2 fixation (注視・停留) の間は、眼は比較的静かに留まり、約250ミリ秒集中する。但し眼はあらゆる語を注視・停留する訳ではない。短く、頻度が高く文脈から予測され得るような語は読み飛ばされる。新しい情報が獲得されるときは注視・停留がなされている間のみにおいてである。注視・停留が終了した後でも、

脳は情報処理を継続している。

- 3 fovea (中心窩) は一番鋭敏な視覚部分で、全視野の内の中心 2% を占める。
- 4 parafovea (傍中心窩) は fovea のすぐ外側部分の視野で、注視・停留した部分のほぼ両サイド 14 文字スペース分に跨る。これは読者に先々現れる語の部分的情報を与える。この部分的情報が “a preview benefit” をもたらす。
- 5 英語の場合の perceptual span (知覚スパン) は対称的にはならず右側に偏っている。即ち読書における視野は注視・停留の位置からほぼ 14 文字分右傾化し、左傾化するのとは 4 文字分となる。
- 6 optical viewing position (眼球の視覚位置) / the preferred viewing position (優先的視覚位置) は語の中央の注視・停留の位置か、あるいは中央のやや左寄りである。10 文字以上の語は 2 つの注視・停留の位置を持つ。
- 7 読者は語を読みの上での基本的単位と見なす。長い語、特に複合語は多様な注視 (または停留) の中で構成要素となる形態素に分けられ得る。読みは文字ごとに、あるいは音節ごとに進む訳ではない。

これに続けて眼球と脳の間密接な共同作用の 3 つの例を提示している。(p.133)

- (1) 新情報が注視・停留の最中のみにおいて理解される一方で、認知作用は注視・停留が終えた後も継続している。眼球運動の研究ではこれを「波及効果 (spillover effect)」と呼んでいる。
- (2) 眼球は普通コンマやピリオドの前で動きを止める。これは脳に統語を分析処理させているためである。
- (3) 眼球は連続して動いている間、脳神経細胞は視覚入力に同時に反応しながらいろいろな回路に情報を動かす。

現代の眼球運動の研究は歴史的・文化的距離がある場合でも、調査に対し複数の可能な道を与えてくれる。この成果を古英詩に適用する前に、Donoghue は次のような想定を立てている。

- * 第一に、読書行為というものは本質的に現在まで変化していない。(p.133)
- * 第二に、自国語の詩を清書する際に、アングロサクソンの写字生は必要なかったが故に、利用でき得る視覚記号をそれほど採用しなかった。(p.134)
- * 第三に、アングロサクソン期に口承文化とテキスト文化の間の歴史的に独特な関係が栄えた。(p.134)

第二・第三点より口承伝統下で洗練された聴衆と洗練された読者層がいたと想定される。よって眼球運動の研究は古英語の詩論 (poetics) の特別な状況を知る上で、有用なものとなると Donoghue は考えている。(p.134)

ここで Donoghue は古英詩における「複合語」・「機能語」と眼球運動との関わりを考察している。本稿では「機能語」の場合を取り上げてみよう。代名詞、前置詞、接続詞、多数の副詞、助動詞といった機能語は脳内で内容語とは切り離された語彙項目と見なされる。眼球運動においては一つの注視から次の注視に移行する際に、機能語は読み飛ばされる第一候補となる。というのは、機能語は綴りが短く、高頻度に生起し、文脈から予測可能であるからである。現代英語の場合に数字的に述べると、平均して3文字語は時間において67%の割合で読み飛ばされ、7から8文字語は注視される時間が大きい。(p.136) この現代英語における眼球運動の研究を踏まえて、Donoghue はパンクチュエーション・マークの前の注視はより長く留まるとし、*Guthlac A* (The Exeter Book, folio 37r: *ASPR*¹³では312に相当) から注視 (F) の位置を以下のように示している。(p.138)

F F F F
weorcum wealdeð · Nisme wiht aetow

13 G.P. Krapp & E. V. Kirk Dobbie, eds. *The Exeter Book*. Vol.3 of *The Anglo-Saxon Poetic Records*. New York: Columbia University Press, 1936.

写本では *wealdeð* のあとにフルストップが置かれ、機能語同士が *Nisme*, *æteow* と融合しスペースなしの一単位となっている。フルストップの前の *wealdeð* にはより長い注視がなされ、*saccade* は次の注視が置かれる *wiht* に向かって *Nisme* を飛び越えているという表示である。注視の位置は韻律上強勢のある語と一致している。アングロサクソンの写字生は、*saccade* や *fixation* についての知識を持っていたとはもちろん考えられないものの、古英詩においては語彙項目と注視との間には相関関係があると同様に、語彙項目と韻律強勢の間にも相関関係があると考えられる。機能語同士の融合はそういう意味でなされていると思われる。写字生は眼球が詩行上をどのように動き、どのようにパンクチュエーションを利用していたかを「経験上から」知っているのではないかと推測を *Donoghue* は与えている。(p.138) また機能語は眼球を一つの *verse clause* から次の *verse clause* へ導く道路標識のような役割を果たしていると言え、これらの語はアングロサクソン人の読者にとっては有用な語であることが認識されていたと見る。(p.140)

現代と古代の人間の認知作用は普遍的であるという観点に立ち、アングロサクソン人の読みを現代の眼球運動を応用しその実態を明らかにしたことは画期的であると言える。また本論では触れなかったが写本における複合語の正字法の問題への示唆¹⁴も注目に値する。

14 複合語に関する *Donoghue* の見解を記しておく。写本では複合語は2つの構成要素間にスペースが置かれ、あたかも分離した語のように書かれることが多い。その状況で、詩が音読されるのを聴くにせよ、写本でそれを読むにせよ、アングロサクソン人は複合語を分離した語として聞いたり認識したりしなかった。その理由は、それらは韻律行において弁別的行為 (“*distinctive behavior*”) をなしていたからである。例えば、複合語の *módsëfa* は第二構成要素に第二強勢をとり、*mod, sefa* と一語となるならば全強勢 (*full stress*) となる。内言による黙読であれ音読であれ、詩的慣習に習熟していたアングロサクソン人にとって、複合語は写本上でどのように転写されていようとも特殊な韻律上のリズムを帯びることが理解されていた。(p.134) 現代の観点から見て正書法が曖昧と思われるような場合であっても、その場に「韻律」が

6-2 Where Verse Syntax, Punctuation, and Eye Movement Meet

ここでは *Guthlac A* と *Beowulf* からの一節の分析を試み、写本に見られるポイント (a manuscript point) について次のようなことが指摘できることを認めている。(pp.143-145)

- (1) a full line の終わりに現れる。
- (2) a half line の直前に現れる。(その場合 a half line は韻律的に軽い節を開始する。1つ、あるいはそれ以上の無強勢の機能語を含む)
- (3) これらの半行の多くは韻律分析をすると、Sievers の type A3 (/ × | × / ×) となっている。
- (4) *Beowulf* において、この type の clause-initial half-lines は動詞から始まる。
(118a, 270a, 388a, 728a, 1188a, 1232a, 1397a, 1425a, 1573a, 1612a, 1626a, 1730a, 1782a, 1888a, 2460a, 2606a)
- (5) (4) の半行はすべて例外なく a manuscript point が先行している。
- (6) *Beowulf*, 1232a (Eode þa to setle) は弱音節が連なる例外的韻律の “verse syntax” を構成している。この前の半行の最後の語を含めて写本テキストを転写すると、bidde · Eode þato setle となる。bidde のところに長い注視が置かれる。というのも次に a manuscript point が置かれているからである。眼球運動にこの注視を促す a manuscript point は、次の半行の “verse syntax” の一部が特異な構成になっていることを読者に警告していると思われる要素がある。

このことから、「写字生は次に来る節の始まりが入り組んだ統語や韻律を含んでいることを示す目印としてパンクチュエーションを用いているようである」(p.147) と考えられ、ポイントは “verse syntax” と密

介入する。上記の *módséfa* のように、その第二要素に第二強勢があればそれは複合語の一部である標識となる。それ故、書記上二つの構成要素を結びつける必要はないというのが古英詩の特徴であると Donoghue は述べる。(p.136) ということは写本上のこのような書記法には、orality の要素が見て取れるということである。現代の正字法に基づき校訂されたテキストには写本の textuality が反映されない落とし穴があると言える。

接に作用しているため、眼球運動を導く重要な役割を果たすものであると Donoghue は強調している。

6-3 Medieval Scribes Speak Back to Cognitive Science

古英詩に関する眼球運動の研究から得られる成果とその関連事項を簡単に3点に絞ってまとめてみると以下のようになる。(pp.150-151)

- (1) 写字生の実践行為を理解する手助けとなる。
- (2) 写本が語、句、節の解釈を初めとして一番の基本的レベルにおいてどのように読まれたであろうかを理解させてくれる。
- (3) アングロサクソン人の写字生は写本のページ上に詩を記す際に様々な手法を試みた。と同時に、自国語の散文やラテン詩に用いた慣習は避けた。

改めて読みのレベルで考えると眼球が詩行上を移動する際に、アングロサクソンの読者は「内言の律動 (“the cadences of inner speech”), p.154」に注意を向けた。その際に “the interplay of verse syntax and punctuation” (p.154) が重要な要素として読みを機能させている。ここには写字生と読者の間の相互的な携わりが見て取れるであろう。

7 Less a Conclusion Than an Opening Up

The Exeter Book (975年頃?), The *Beowulf* MS (1000年前後), The Vercelli Book (960-80年頃), The Junius MS (1000年頃) の古英詩の四大写本が作成されていたとほぼ同時期に、韻律の慣習は「後期古英詩」としてジャンル分けされるほどの新しい変化を遂げつつあった。この章では後期の新たなタイプの詩に注目しながら、「前期古英詩」と比べてどのような変化が見られるのか、その特色を掘り起こしている。さらには、読者が後期アングロサクソン・イングランドの自国語の詩の中に持ち込んだ “competence” について、これら後期の詩が何を物語っているかをも問うている。(p.156)

先ずは近年の研究による後期の古英詩の特徴が述べられている。

(p.157)

- (1) Sievers の 5 つのタイプに当てはまらないいくつかの韻律構造を用いる。
- (2) タイプ C, D, E を犠牲にしてタイプ A, B をより多く使用する。
- (3) 行首余剰音 (anacrusis) を含めて、無強勢の音節をより自由に分布させる。
- (4) 第 3 強勢の消失と第 2 強勢の減少。
- (5) 軟口蓋音と硬口蓋音の g の頭韻、そして軟口蓋音と破擦音の c の頭韻をそれぞれ分けて行う。
- (6) 頭韻に代わる押韻と無韻の使用。
- (7) 1 行の最後の強勢のある音節に頭韻を使用、そして他の頭韻の変容。
- (8) (ケニングを含めて) より少ない複合語。
- (9) 詩語の使用の減少。
- (10) 散文語の使用の増加。
- (11) ヴァリエーションと並置の減少。
- (12) 行末休止の行の増加。
- (13) より短い節の増加。(しばしば長さが半行か、1 行)
- (14) 洗練した定型表現の構成技法。
- (15) 無強勢の音節における母音間の差異を縮小する。

10 世紀かそれ以降の詩は、上記で示したような韻律、統語、詩語法の変化項目のいくつかの組み合わせがなされて構成されている。

(p.157) また *The Judgment Day II* に見られるように、10 世紀に新しい頭韻詩スタイル (頭韻と脚韻の併用など) が現れ、従来の伝統であった韻律、“verse syntax” に変化が起こった。(p.159) そして後期の詩が “verse syntax” から離れていくことは、初期の詩の伝統的な “verse syntax” と manuscript punctuation の結びつきを断ち切って行くことを意味する。そのことが後期の詩を特徴づける韻律、頭韻、語彙項目の変化の他に新たに加えられる変容項目となっている。(p.167)

このような変化の指摘を見ると、一見 orality の要素がはぎとられ

て行ってしまう傾向にあると思われがちである。というのも、11世紀の古英詩に関する批評的論考はもっぱら“literate art”という観点からなされることを前提とし、この見解では詩というものは写本室で作成されたものであり、その際“a literate-formulaic compositional technique”が幅を利かせ、口承詩の役割はわずかなものであったとされることになるからである。(p.171) 言い換えれば、“a literate-formulaic compositional technique”の海の中に“the oral-formulaic tradition”が飲み込まれてしまったと言えそうであるが、Donoghueは “[T]he literate-formulaic method was an island within an oral-derived sea.” (Notes, p.211) という言明でもってその考えに反論している。

後期古英詩である *Seasons for Fasting* (11c.) は *Beowulf* (8c. 半ば) や *Andreas* (9c. 半ば) に見られる継続的な“the oral-derived tradition”の駆使が見られる。そのことからこの詩は、初期の詩に見られる韻律と統語の複合的構造を辿って行く能力を備えた聴衆を対象として創作されたものと想定される。言い換えれば、このような詩は聴いている読者に「話しかける」テキストの様相をなしているということである。口承伝統は「内声」を通して黙読する読者でさえ、時空間の外に広がるコミュニティーに結び付ける。音読であろうと黙読であろうとこの「結び付き」に“immersion”していることにより、単に（詩を）記憶する行為のみに留まらずに、より生産的な行為が喚起されるのである。そう言える理由は、“Old English oral-derived verse”を支えている“the traditional referentiality”「伝統的参照性」とこの“immersion”の状態には深い関りがあるとされるからである。(p.173) このことこそがアングロサクソン人の中に伝統として培われてきた韻文読解への潜在的認知力、即ち“competence”が継承され備わっていることを意味するものであろう。

終わりに

従来の中古英詩研究は詩人の立場から考察されたものが主であった

が、本書は読み手側に立ち詩がどのように読まれたのかという視点が大きな特色となっている。アングロサクソン人が詩に対して持っている“competence”とは何かを絶えず考慮しながら論展開されている点は、認知的観点からの新たな古英詩へのアプローチと見てよいであろう。また orality を literacy の対極に考えるのではなく互いに増補的關係にあるとした議論や、写本に見られるパンクチュエーションと“verse syntax”との絡み合いを解き明かし、さらには現代の眼球運動の研究法を応用して古英詩の読みの方法を探るなど斬新で説得的な面に富んでいる。ただ、異論がない訳ではない。眼球運動や認知研究の応用は第一次的な証拠の点から決定的なものとは成し難いという指摘や、orality を考える上で「ことば」だけが口承詩の主要な構成要素とは限らず、“live performance”から派生する要素も考慮に入れるべきである¹⁵という見解もある。確かにこのような批判点はあるにしても、議論の切り口、方法論の斬新さ、そして何よりもアングロサクソン人に備わった詩を読む際の“competence”にメスを入れた点は、これまでにない古英詩の新しい解読法を与えてくれたと言えよう。

参考文献

*主要参考文献への言及は本論中に含めたので、ここではそれ以外のもののみを記載する。

Dobbie, E. V. Kirk, ed. *The Anglo-Saxon Minor Poems*. Vol.6 of *The Anglo-Saxon Poetic Records*. New York: Columbia University Press, 1942.

Fulk, R.D. and C.M. Cain. *A History of Old English Literature*. 2nd ed. Oxford: Wiley-Blackwell, 2013.

Fulk, R.D., Robert E. Bjork, and John D. Niles, eds. *Klaeber's Beowulf and the Fight at Finnesburgh*. 4th ed. Toronto: University of Toronto Press, 2008.

15 Tiffany Beechy, “Donoghue, How the Anglo-Saxons Read Their Poems.” *The Medieval Review* (<http://scholarworks.iu./journals/index.php/tmr>) 19.02.07.

Gollancz, Israel, ed. *The Exeter Book, Part I: Poems I-VIII*. EETS o.s. 104. 1895.
New York: Kraus Reprint, 1978.

松浪有, 御輿員三. 『講座英米文学史 1 詩 I』 東京, 大修館書店, 1977.

Zupita, Julius, ed. “*Beowulf*” *Reproduced in Facsimile from the Unique Manuscript, British Museum MS. Cotton Vitellius A. xv*. 2nd ed. rev. by Norman Davis.
EETS o.s. 245. London: Oxford University Press, 1959.